アマチュアオーケストラ

新交響楽団第135回演奏会

The New Symphony Orchestra The 135th Concert

現代の交響作品展'92

指揮：石井 眞木

夏田 昌和（自作を指揮）

夏田　昌和：《モルフォジェネシス》――オーボエとオーケストラのための

（新交響楽団公募入選作品 改訂版初演）

NATSUDA Masakazu : "Morphogenesis" for oboe and orchestra, 1991

オーボエ独奏：柴山　洋

SHIBAYAMA Hiroshi, Oboe Solo

●

一柳　慧：ピアノ協奏曲第１番《空間の記憶》

ICHIYANAGI Toshi : Piano Concerto No.1 "Reminiscence of Spaces", 1981

ピアノ独奏：一柳　慧

ICHIYANAGI TOSHI, Piano Solo

休　憩

石井　眞木：交響三連作《浮游する風》

ISHII Maki : Symphonic Linked Works "Floating Wind"

I 雅霊

Garei (The Spiritual Power of Gagaku)

II風姿

Fûshi (Shape of the Wind)

III 砕動鬼

Saidôki (Demon)

連作初演　*Linked Works－world première*

打楽器独奏：山口恭範

YAMAGUCHI Yasunori, Percussion Solo (Saidôki)

＊この演奏会は次の財団から助成をいただきました。

（財）アサヒビール芸術文化財団

（財）花王芸術文化財団

（順不同）

1992年4月11日（土）7：00 p.m.

東京文化会館

主催：新交響楽団

後援：朝日新聞社

日本作曲家協議会

現代の交響作品展'92の開催にあたって

新交響楽団ではこれまで、10回のシリーズを数えた「邦人作品展」を中心に、数多くの日本人の交響作品を演奏してまいりました、その主旨は、初演こそなされたものの、そのまま何十年も埋れたままになっていた先人たちの偉業を、今一度振り返ろうというものでした。また昨年行った「現代の交響作品展'91」では、作曲家石井眞木の指揮で「同時代」の作品にもチャレンジし、好評をいただくことができました。そこで今回は、初演されたまま埋れている作品や、いまだ初演すらされていない作品の中にも、必ずや優れた「同時代」の作品があるに違いないとの信念のもと、初めて作品の公募を試みました。

その反響は大きく、国内外の幅広い年齢層の方々から、新作17作品を含む33件の応募をいただきました。選考には指揮者石井眞木と当団の代表数名があたり、厳正な審査の結果、夏田昌和作曲「モルフォジェネシス――オーボエとオーケストラのための」を選びました。

当初は石井眞木がこの公募作品を指揮する予定でしたが、「作曲家その人の意志をより深く演奏に反映」するために、作曲者夏田昌和自身が指揮をさせていただくことになりました。そして作曲者のもとでじっくりと時間をかけたリハーサルを行ないました。

「作曲者が演奏に直接関わる」という私たちの意図は、他の2作品についても共通しております。そして共演者には、現在望みうる最高の奏者を迎えました。

本日の演奏を通じて「同時代」の響きをすこしでも皆様にお伝えできれば幸いです。

本日はご来場誠にありがとうございました。

1992年4月11日

新交響楽団運営委員長
門倉　昭一



●作曲・指揮

石井 眞木 ISHII Maki

＊一柳慧：ピアノ協奏曲第1番および自作《浮游する風》を指揮

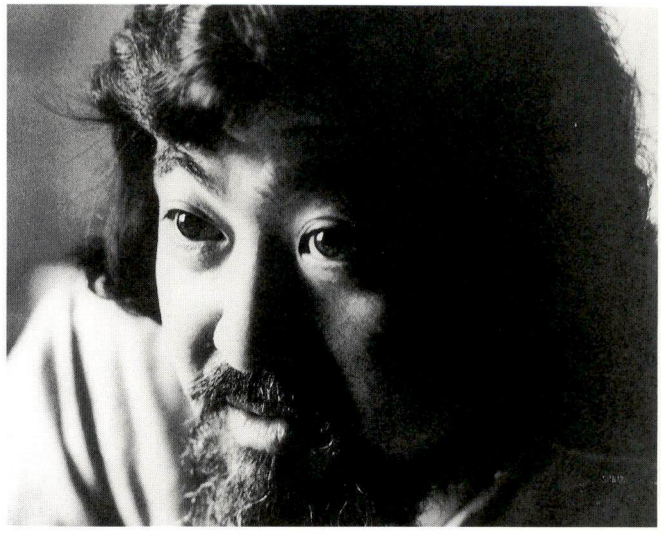
石井眞木は日本を代表する国際的な活躍をしている作曲家である。

1936年近代舞踊の草分け舞踊家石井漠の三男として東京に生まれた石井眞木は、東京において作曲、指揮、ピアノ、ヴァイオリン等、初期の勉学を終えた後1958年渡独、ベルリン音楽大学作曲科に入学、同校を卒業した1961年まで4年間にわたる留学生活を送った。在学中に「現代音楽のためのダルムシュタット夏期講座」(西独)はじめ、いくつかの国際現代音楽祭で初期の作品が演奏され、注目された。

1962年帰国後は、東京を中心に活発な作曲活動を行う。1969年、ベルリン市の「芸術家プログラム」の招きで再渡独して以来、現在までベルリン—東京の二都を本拠に、作曲家、指揮者、フェスティヴァルのオルガナイザーとして精力的な活動をしている。この間、日本の主要オーケストラをはじめ、ベルリン・フィル、パリ管、フィラデルフィア管、ボストン響、スイスロマンド管等、世界各地の交響楽団で石井作品が演奏されている。また「パリの秋フェスティヴァル」(1978)、「ベルリン芸術週間」(1981)、「ジュネーブの夏フェスティヴァル」(1983)、「ベルリン市政750年記念コンサート」(1987)、「作曲家の個展'89・石井眞木」(サントリー音楽財団／1989)、「石井眞木作品集」(第303回東京都交響楽団定期公演／1990)などで、〈石井眞木特集〉のコンサートが開催されている。

また、指揮者としては1979年新日本フィルハーモニー交響楽団に客演指揮者として迎えられて以来、スイスロマンド管弦楽団、ベルリン放送交響楽団などに客演、最近では、自作の二幕物のバレエ「輝夜姫」(振付：イリー・キリアン／ネザーランド・ダンスシアター)をオランダ、西独各地で40回にわたり指揮し、大きな成功をおさめている。

また、この6月に行われる「ベルリン打楽器フェスティヴァル」の「石井眞木特集」では、「今回改訂初演



される「砕動鬼」(独奏：山口恭範)および「打楽器協奏曲」(独奏：吉原すみれ)、「モノプリズム」の自作プログラムを指揮する。演奏はベルリン放送交響楽団。

主な受賞歴は、「ドイツ大使賞」(1963)、「イタリア賞／ヴェネチア市賞」(1973)、「尾高賞」(1977)、「芸術祭優秀賞」(1968、73、78、80)、「中島健蔵音楽賞・最優秀賞」(1985)、「ドイツ批評家賞」(1988)、「プラハの春・特別賞」(1990)、「京都音楽賞・大賞」(1990)など。

●作曲・指揮

夏田 昌和 NATSUDA Masakazu

＊自作《モルフォジェネシス》を指揮

1968年7月東京生まれ(23歳)。幼少の頃より両親に音楽の手ほどきを受ける。青山学院中等部、東京芸術大学音楽学部付属音楽高等学校を経て、87年4月東京芸術大学音楽学部作曲科入学。90年学内にて安宅賞受賞。同年3月第1回京都フランス音楽アカデミーにて、伴奏ピアニストを務める(アラン・ムニエのチェロクラスを主に担当)。91年3月同大学を首席で卒業後、同大学院修士課程に入学、現在在学中。

大学卒業作品である「オーボエとオーケストラのための“モルフォジェネシス”」が同大学オーケストラによって東京文化会館にて演奏される。91年11月第60回日本音楽コンクール作曲部門(室内楽)第3位入賞。92年1月新交響楽団作品公募入選。92年3

月第2回出光音楽賞（作曲部門）受賞。また、89年10月より現在に至るまで、洗足学園大学指揮研究所に研究生として在籍、研鑽を積む。これまでに作曲を野田暉行、永冨正之、近藤譲、尾高惇忠、内田勝人の各氏に、指揮を秋山和慶、河地良智、増井信貴、尾崎晋也の各氏に、ピアノを植田克己、竹内啓子の両氏に、オルガンを今井奈緒子女史に、スコアリーディングおよび伴奏法をH.ピュイグ=ロジェ女史に、それぞれ師事。父は作曲家の夏田鐘甲。

〔主な作品〕

オーケストラのための「STRATA」（1990）
吉原幸子の詩による「2つの歌曲」（1990）
「抽象」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ～ピアノのための～（1990）
「Morphogenesis」
～オーボエとオーケストラのための～（1991）
「Rapprochement」
～フルート、オーボエと小器楽アンサンブルのための～（1991）
ヴォーカルとピアノのための「夜、三題」
～Y.リッツォスの詩による～（1991）
「Quatre Prismes dans l'Espace」
～12本のトランペットと打楽器のための～（1991）

夏田 昌和 NATSUDA Masakazu, "Morphogenesis" for oboe and orchestra, 1991

《モルフォジェネシス》――オーボエとオーケストラのための（新響公募入賞作品）

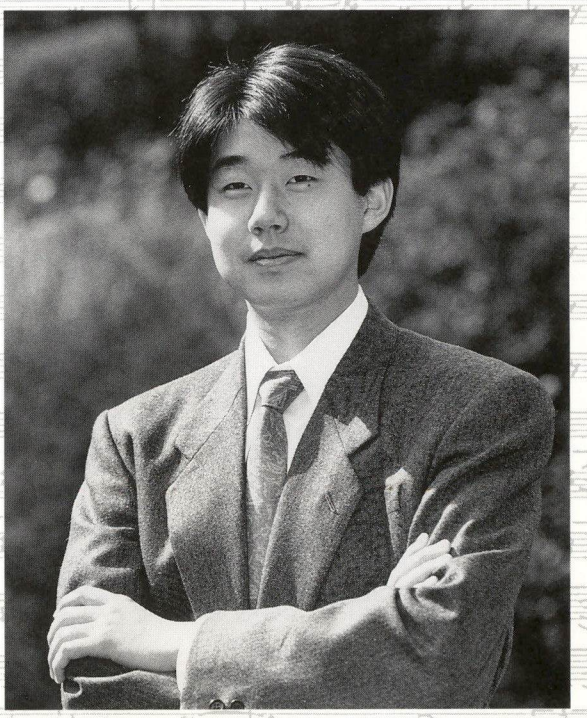
独奏オーボエとオーケストラによるこのMorphogenesis（形態形成）は、オーボエとオーケストラという対照的な表現媒体によって生み出される多様な形態のうちに、私の最近の創作における主要なテーマの一つである“音響の構造化”を試みた作品である。

二つの媒体のうち、オーケストラは主として空間的な構造化に寄与しており、非連続的ないくつかの音響を形成する。それぞれの音響は、常にそれを構成するさまざまなレヴェル――点描的な一つの音からある音形（モティーフ）、さらに旋律的なものまで――における諸要素の“束”として捉えうるもので、各々に固有の音程や音色（楽器群）によって性格が特徴づけられている。

これに対し独奏オーボエには、より時間的な方向性を楽曲に与える役割が充てられている。すなわち、開始部においてそれはオーケストラという音響体を導き出し、初期にはオーケストラの各音響をつなぐBridgeとして機能するが、同調と拒絶を繰り返すうちにやがて独自の時間をもってこれと対峙し、拮抗するに至るのである。

この両者の間では特に音程を媒介として恒常的に情報が交換されており、これによる相互の交感に、本作品のもう一つの主眼が置かれている。

初演は昨年4月に、小畑善昭のオーボエ、小田野宏之指揮の芸大オーケストラによって、同じ東京文化会館にて行われたが、その後、数箇所にわたって手が加えられたため、今回の演奏がその改訂版初演となる。（夏田 昌和）



楽器編成：フルート３（２、３番ピッコロ持替）、クラリネット３（２番Ebクラリネット持替、３番バス・クラリネット持替）、ファゴット３（３番コントラファゴット持替）、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、テューバ、打楽器（奏者５人――ティンパニ、木琴、グロッケンシュピール、マリンバ、ヴィブラフォン、ウッドブロック、ボンゴ、カウベル５、アンティックシンバル、ゴング５、吊りシンバル２、トムトム５、大太鼓、タムタム）、ピアノ、チェレスタ、ハープ、弦楽器、オーボエ独奏



●オーボエ独奏

柴山　洋 SHIBAYAMA Hiroshi, oboe

1948年生まれ。早稲田大学中退、その後桐朋学園大学に学ぶ。1970～76年東京交響楽団、1977～85年新日本フィルハーモニー交響楽団に在籍、ともに首席をつとめ、同団定期演奏会等で数回にわたってソリストとして演奏。同団退団後は、桐朋学園において後進の指導にあたるとともに、フリーの演奏家として現代音楽をはじめすべてのジャンルで活躍している。

新交響楽団とは1982年以来トレーナーとして現在に至る。また、1988年には同団第121回演奏会にてリヒャルト・シュトラウスのオーボエ協奏曲を共演。

一柳　慧 ICHIYANAGI Toshi : Piano Concerto No.1 "Reminiscence of Spaces", 1981

ピアノ協奏曲第1番《空間の記憶》

作品は１楽章形式のピアノ協奏曲である。表題にも示されているように、この「空間の記憶」も、私の他の多くの作品と同様に、音楽における空間の問題が基本的な考えをつかさどっている。

音楽はこれまで主に時間芸術として考えられてきた。だが、日本古来の音楽にもみられるように、音楽は本来時間と同時に、空間とも密接なかかわりをもっているものではないだろうか。私は自分の音楽の一つの方向として、空間の問題を、時間と分かちがたく結びついた対象としてとらえ、追求していきたいと考えている。「空間の記憶」もその一環を成す作品である。

曲は３つの部分から構成されている。一部ではまず多層な空間の呈示が行われる。ここでは動きを育もうとする要素と、それを抑制し、突き崩そうとする力の葛藤が続き、時間はつねに零の状態に還元される。二部では、ピアノとオーケストラによる２つの異質な空間が、漸次拡張されてくることで、一つの形態へと高揚していく。ここでは時間の要素も次第に顕著になる。三部は五音を基本とする音型が、音楽の密度を醸成し、ピアノを中心に一部とは対照的な時空間を形成する。そのあと、一部の凝縮されたかたちが終結部への導入となって再現される。

（一柳　慧）

＊NHK 交響楽団「フィルハーモニー」1982年３月号より転載

楽器編成：ピッコロ、フルート２、オーボエ２、イングリッシュホルン、クラリネット２、ファゴット２、コントラファゴット、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、打楽器（グロッケンシュピール、ウッドブロック、マリンバ、木魚、トライアングル、吊りシンバル、テューブラーベル、タムタム、ボンゴ、小太鼓、トムトム、大太鼓）、弦楽器、ピアノ独奏

●作曲・ピアノ独奏

一柳　慧　ICHIYANAGI Toshi, piano

1933年神戸生まれ。作曲家、ピアニスト。作曲を平尾貴四男、池内友次郎、ジョン・ケージに、ピアノを原智恵子、ヴィヴェレッジ・ヴェブスターの各氏に師事。第18回（'49）および20回（'51）音楽コンクール作曲室内楽部門第１位入賞。1954年から57年までニューヨークのジュリアード音楽院に学び、その間にクーセヴィツキー賞、グレチャニノフ賞などを受賞。'67年ロックフェラー財団の招聘で渡米、アメリカ各地で作品発表会を行う。'76年西ドイツ政府の招聘でベルリン市に滞在、欧州各地の音楽祭で自作の発表会と邦人作品の演奏を行う。



海外ではオランダ・フェスティバル（'79）、ケルン現代音楽祭（'78、'81）などでの作品の委嘱と演奏会の他、'81年はベルリン芸術音楽祭からの招きによる委嘱作を含めた作品の発表会と、内外で作曲と演奏活動を意欲的に展開している。

ピアノ協奏曲第１番《空間の記憶》で'81年度第30回尾高賞を受賞。

'84年に近年の作品、演奏、プロデュース活動に対して中島健蔵賞を受賞。また、２回目の尾高賞をヴァイオリン協奏曲《循環する風景》で受賞。２月にはカーネギー・ホールでこの曲をニューヨーク初演、６月には「ミュージック・トゥディ」でフェスティヴァルの1984年度のテーマ作曲家として作品演奏会を行う。６月27日に日仏文化サミットの一環として武満徹とともにパリのシャンゼリゼ劇場でフランス国立管弦楽団（指揮・岩城宏之）によるオーケストラの作品演奏会を行う。

'85年５月、フランス政府より芸術文化勲章を受章。

'88年11月、サントリー音楽財団の主催による「作曲家の個展――一柳慧」で、同財団委嘱曲、交響曲《ベルリン連詩》を発表。この演奏会の功績により、'89年１月第30回毎日芸術賞受賞。なお'90年にはこの曲で４度目の尾高賞を受賞している。'89年に京都音楽賞大賞受賞。

現在はインターリンク・フェスティヴァル芸術監督、東京セゾン美術館における「ミュージック・イン・ミュージアム」などの音楽監督、国立劇場顧問、オーケストラ・アンサンブル金沢顧問などをつとめ、現代音楽の普及に携わっている。

よい音楽を楽しんだあと、
くつろぎの一杯。



創業明治13年・デンキブラン
神谷バー
1階 神谷バー　2階 レストラン　3階 割烹　火曜定休
東京都台東区浅草1-1-1　☎03(3841)5400

石井 眞木 ISHII Maki : Symphonic Linked Works "Floating Wind"

交響三連作《浮游する風》——雅霊・風姿・砕動鬼

「浮游する風」は、1988年～89年に作曲した交響三連作である。それぞれは独立したオーケストラ作品で、1989年秋には単独で初演されているが、連作として当初からそれぞれの三作品に、「雅霊」→序・「風姿」→破・「砕動鬼」→急という性格を与えて構想し、作曲した。したがって、オーケストラ編成も三作品共通の規模で書いている。但し、第III曲の「砕動鬼」は、〈急〉の性格をより強調するために、単独初演後、「打楽器協奏曲」に改作した。

題名の「浮游する風」は、船山隆氏の論文*で引用されている今道友信氏の一節、

「結晶の美学としての抑制の極が、却って結晶の形を超えて無形のそこはかとなき漂いに昇華され空に浮遊する風に化してゆく不思議な過程」**

からとった。この美しき言葉で表わされている変容の美学が、この作品に相応しいかは別として、響きと時間の〈変容〉はこの交響三連作の核心をなすコンセプトなのである。

＊）船山隆「東西交響の只中で……石井眞木の《風姿》に関する一考察」ポリフォーン第9号、1991/TBS ブリタニカ、P.174

＊＊）今道友信「東洋の美学」1980/TBSブリタニカ、P.279～280

I「雅霊」

千数百年も伝承されてきた雅楽の音楽に、私はある霊威（すぐれた不思議な力）を感ずる。「雅霊」は、この雅楽から多くの示唆をえて創造された作品である。

〈悠久〉といわれる雅楽特有の音楽時間もその一つであるが、例えば、この曲の中枢には、舞楽で舞人が登退場する際の音楽に準拠した手法があり、その堆積する音響集合によって、交響的音楽時間に、ある空間性が生じる。これは、いわゆる西洋音楽には存在しない概念—時間的空間性とも呼ぶべきものであろう。また全体構成にも、西欧的構成法とは異質な、雅楽と古来密接な関わりのある易学の「太極」のコンセプトを導入するなど、東西の構成理念の統合から、新たな音世界の表出をしようとした。

単独初演：1989年9月23日オーチャードホール、指揮：小泉和裕、東京都交響楽団［Bunkamura 開場記念委嘱作］

II「風姿」

「あらゆる物事をつうじて序破急ということがある……」

と、これは世阿弥の「風姿花伝」の一節である。そして、「花鏡」では、

「ひとさしの舞を、序・破・急という変化の秩序にあてはめるように構成し……」

と記述している。

このほぼ六百年前の芸術論によるものは、一般に現代のわれわれがもっている序破急の認識とは隔たりがあるようだ。本来「序破急」とは、創造の根本であり、哲学でもあり、深奥である。

私は、オーケストラのための「風姿」を書くにあたって、この世阿弥の序破急の理念に、あらためてある啓示をうけ、この作品のすべての音・律要素に投射し、現代の鏡に反射させ、そこから新しい調和と合一を得んとした。

ここで生じる音響の出来事（Ereignis）は、ミクロ的には増減と複合的な変化をくりかえし、マクロ的には音響の交錯の内に、一つの序破急の〈変化の秩序〉という大きな空間を描こう。

「風姿花伝」には、時代を超えた創造の奥義とも言うべき言葉、

「秘すれば花なり……」

があるが、この言葉のもつ意味を、この作品で求めたこともここに記しておきたい。

単独初演：1989年10月サントリーホール、指揮：石井眞木、東京都交響楽団［サントリー音楽財団委嘱作］

III「砕動鬼」——打楽器独奏とオーケストラのための

応永30年（1423年）、61歳の世阿弥が次男の元能に相伝した「三道」（三体作書）で、

「砕動風というのは、荒々しさを基本としながらも、同時に身を砕いて演じる様式である」

「砕動風の鬼は、姿かたちは鬼でありながら心は人間を演ずるのである」

と述べている。

この作品のタイトル「砕動鬼(さいどうき)」はここからとられた。打楽器独奏は、金属彫刻家・原田和男氏と、打楽器奏者・山口恭範氏の共同制作の「シデロ・イホス(Cidelo Ihos)」なる新らしい鉄製の打楽器を中心に、金属、木質(竹)打楽器により、特異な複合音響を現出させる。そして、オーケストラ・サウンズと一体となりながら、〈力感ある荒々しい鬼〉の表層と、〈人間的な心〉を表わしながら、ある一つの音響の世界を求めていく。

なおこの作品は、本日の連作初演を機に「打楽器協奏曲」として改作した。旧題名は「オーケストラのための砕動鬼」－風のエモーション－。

(石井　眞木)

単独初演(オーケストラ作品として):1989年11月20日サントリーホール、指揮:大友直人、新星日本交響楽団［同団創立20周年記念委嘱作］

使用楽器:フルート3(ピッコロ持替、3番はアルトフルート持替)、オーボエ3(3番イングリッシュホルン持替)、クラリネット3、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン6、トランペット3、テナー・トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ハープ2、チェレスタ、ピアノ、弦楽器

打楽器(奏者6人)、

1番奏者:ヴィブラフォン、ムチ、鈴(スレイベル)、シンバル(合わせ)、木鉦(小)3、木魚(小)3、吊りシンバル(大)、中太鼓(大)、ティンパニ(シデロイホス用)1、ヴィブラフォンのためのヴィオラまたはチェロの弓、シデロイホス(四角－ティンパニの上で)、〈混沌〉を表現するための任意の打楽器、

2番奏者:タムタム(大)、グロッケンシュピール、吊りシンバル(中小)、中太鼓(大)、アンティックシンバル(in E)、アンティックシンバルのためのヴァイオリンの弓、ウィンドシュピール(タムタムの表面にかける貝のチャイム)、〈混沌〉を表現するための任意の打楽器、

3番奏者:吊りシンバル(中小)、木魚2(中小)、鈴(スレイベル)、トムトム(大中小)、ティンパニ(通常奏法用)2、ティンパニ(シデロイホス用)1、シデロイホス(六角－ティンパニの上で)、〈混沌〉を表現するための任意の打楽器、

4番奏者:タムタム(大)、木琴、ウィンドシュピール5～7(貝、釘、ガラス等のチャイム)、吊りシンバル(中小)、鈴(中)、木鉦(中小)、〈混沌〉を表現するための任意の打楽器、

5番奏者:大太鼓(大)、ヴィブラフォン、鈴(スレイベル)、コンガ、〈混沌〉を表現するための任意の打楽器、

6番奏者:小太鼓、コンガ、クラベス(拍子木)、アンティックシンバル(2オクターブ)、テューブラーベル、ティンパニ(シデロイホス用)1、シデロイホス(四角－ティンパニの上で)、〈混沌〉を表現するための任意の打楽器、

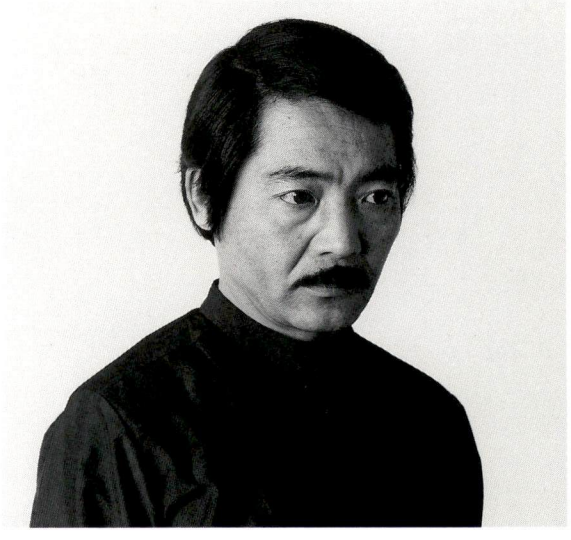
第Ⅲ曲「砕動鬼」の打楽器独奏者の打楽器群:シデロイホス①②(ティンパニの上で)コントラ・シデロイホス、サテライト・シデロイホス、鉄製打楽器群、木製(または竹製)打楽器群

＊「砕動鬼」の独奏者は「雅霊」「風姿」では打楽器6番を演奏する。

出版:メック出版社(EDITION MOECK-Celle Germany)

●打楽器独奏

山口　恭範 YAMAGUCHI Yasunori



1941年東京生まれ。東京芸術大学を卒業後、欧米で研鑽を積み、1966年パーカッション・リサイタルを開催し、注目される。1972年より10年間、新日本フィルハーモニー交響楽団に在籍。1972年、ピアノの高橋アキ、フルートの小泉浩とともに現代音楽演奏グループ「アーク」を結成。1983年には「第1回中島健蔵賞」を受賞。同年、西武劇場における「第11回 Music Today」でリサイタルを行う。その間、ベルリン芸術週間、ワルシャワの秋、パリの秋、ロンドン、ニューヨーク等の主要音楽祭に出演するなど内外でソロおよびアンサンブル活動を続けている。同志社女子大音楽科非常勤講師。

打楽器の喜び

上原　誠

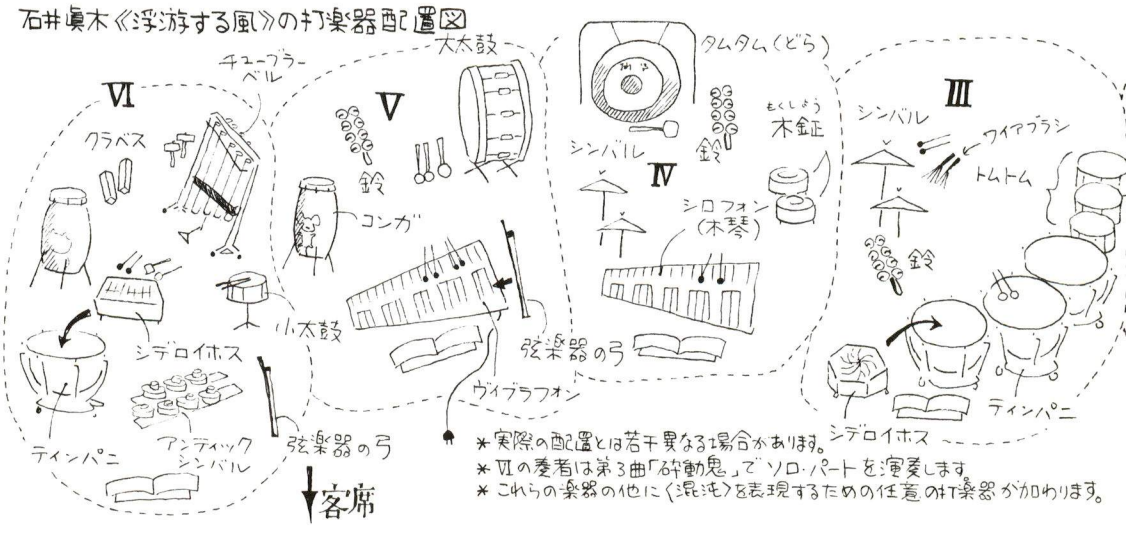
打楽器と言えば……多くの人たちが、まず思い浮かべるのは、トライアングル、カスタネット、タンブリンといった愛すべき小物たちでしょう。子供の頃にだれでも一度は手にしたことがあるはずだと思います。初めて触れた楽器が打楽器だったという方、そしてこれらを通して、合奏の楽しさを知った方も多いことでしょう。だれでも簡単に音が出せて、楽しめるのが打楽器です。でもオーケストラの楽譜に書かれた音となると話は別、それぞれの楽器にとって一番良い音は？　その曲に最もふさわしい音は？　正解というものは決してないだけに、悩み、苦しみの連続といっても言い過ぎではありません。

今回の演奏会で使用する打楽器類は、楽譜に指示されているだけで28種79個に及びます。ふだんあまり馴染みのない楽器も含めて大量に並べ、今まで見たことのないほど、難しい楽譜と格闘しています。それに加えて、これだけ大量の楽器を練習場に運び込み、スタンドにのせたり、枠を作って吊るしたりして自分のまわりに並べ、練習ができる状態にするまでが大変。悩み、苦しみに加えて、疲労も今までに比べてケタ違いです。でも、そんな無我夢中の中から、しだいに音が自分のものになってゆき、音楽が形作られてゆきます。



特に今回は、作曲者自身が、指揮とピアノ独奏で直接指導して下さいます。さらに私たちにとって幸運なことに、「浮游する風」のソリストは現代音楽の打楽器の第一人者、山口恭範氏です。毎回の練習に私たちと並んで音を出し、細かい奏法まで、お手本を示しながらの指導です。撥を持つ手が鈍ろうものなら、それこそバチが当たります。

いまだに「泰西名曲」崇拝が根強いクラシック音楽の中で、打楽器は他の楽器の引立て役、いわば従の立場に甘んじていました。しかし今回のような曲にあって、打楽器は他の楽器群と同等、否、それ以上に音楽を作り上げるための主導的立場にあるといっても過言ではありません。実際、「浮游する風」の楽譜には「混沌を表現するための任意の打楽器」と記され、奏者の自由に任されている部分があります。作曲者とともに、そしてさらに現代打楽器音楽の第



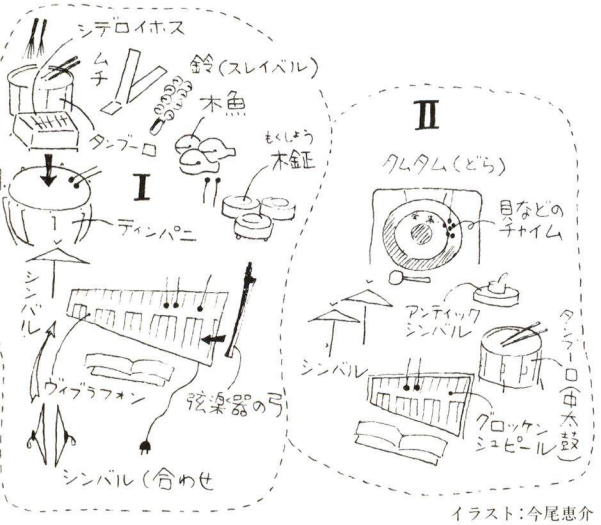
一人者とともに音楽を創造してゆく喜びは、他の楽器では味わうことのできないものであると、独断と偏見をもって言ってしまいます。

毎日の練習の後、他のメンバーより確実に30分は遅く口にするビールは、その時によって、悲喜こもごも。でも本番終了後、打上げで飲むビールが今までになくおいしいものになるよう、がんばりたいと思っています。

ステージに並んだ楽器を図で紹介します。その中でほとんどの方が初めて目にする「シデロ・イホス」について簡単にふれておきましょう。

“CIDELO IHOS”とは金属彫刻家、原田和男氏の創作になる鉄の楽器の総称で、今使っている四角形、六角形、丸いものの他にさまざまな形のものがあります。まず四角、六角のものは、鉄でできた箱を伏せて四隅に小さい足をつけ、底の部分には不規則な切れ目が入れてあります。これを少しずつ場所を変えながら叩くと、切れ目で分かれた部分ごとに違った音程の音が出ます。バチを変えれば、また音色も変わり、さらにこれをティンパニの上にのせ、叩きながらペダルを操作すると、より変化に富んだ音が得られます。

ここで案外知られていないティンパニのペダルについて、少し触れておきましょう。ティンパニは音程を定められる太鼓で、楽譜の指定に従って音程を



イラスト：今尾恵介



変えるには、皮（本来は牛、羊などの皮、今はほとんどポリエステル・フィルム）を張った枠を鍋状の胴体に締め付けてあるネジを操作します。現在の楽器ではそのネジが傘の骨のようにつなげられ、ペダルで一度に操作することができます。ロマン派以降の曲の多くはペダル式を前提に作曲されています。シデロ・イホスがティンパニに共鳴する音は、ペダル操作によって上下するというわけです。

さて、丸型のシデロ・イホスはもっと変わっていて、ボールのてっぺん、いわば北極の部分からパイプが突き出ていて、赤道部分からパイプと同じ方向に向かって１本ずつ長さの違う鉄の棒が、ぐるりと取り巻いています。奏法はパイプを手で支え、棒や本体をバチで叩いたり、ぐるりの棒を弦楽器の弓で奏いたりします。これもティンパニにのせて演奏しますが、さらに驚いたことに、このボールには水が入っていて、傾けて中の水が動くと音程も変化します。今までの楽器のイメージからかけ離れて不定な音だらけ、なのです。



団員紹介のお願い

新響では、より良い音楽を追求するため、新しい団員を募集しています。

そこで、御来場の皆様の知人、近所の方で、“この人は！”といった方がいらっしゃいましたら、この下のハガキに御紹介お願い致します。

御紹介頂きました方については新響より個別に連絡させて頂きます。私達はより多くの方々と音楽のすばらしさを分かち合いたいと願っております。

御氏名：

御住所：

御連絡先：

紹介欄（ご紹介頂いた方の氏名、パート、連絡先、会員の方との関係等おさしつかえのない範囲でご記入下さい。）

JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本美由起
〒105 東京都港区西新橋1-7-13
☎(03)3502-6551



音楽のHAPPYはL♥VEで返そう。

聴いてるだけじゃないんだと思う。ときどき一緒に歌っているし、たまに胸の奥が熱くなる。
音楽があると、淋しい部屋がちょっと明るくなって、トゲトゲした気持ちがまぁるくなったりする。
HAPPYになるんです、きっと。プレゼントをもらったらありがとうってお礼を言うみたいに、こんな幸せな気持ちは愛でお返ししたいね。
JASRACは著作権の管理を通して世界の音楽をたいせつに守っています。